

いた人文的要素の相違によつて、金扇状地の果樹園化は諸タイプを示し、ここに各々の地域性が生じてくると思われる。しかし大きな目でみれば、金扇状地は自給的未作をもとにした零細商品農業地域と文えるであらう。

卒論を書き終えて

(三浦半島南帯北部の地形と土地利用)

川喜田 光子

三年も終りに近い頃「卒論に関する話があるから集合するように」との伝達があつて、ぞろぞろと先生のお部屋に集つてはみたものの「卒業論文、などという言葉は何が空恐ろしい響きをもつばかりで、自分のことだという実感とはまるで程遠いものであつた。

「東京付近の一地域を選んでその地誌を作る」というのが今年の卒論の狙いであつたが、さあ何処が良いだろう？ 此処でもない、彼処でもないと思案しつつ決定をみないままに、周函では次々と地域の選採が違ふで行く模様。とうとう、交通便利で現地調査が容易なこと、軍の要塞地であつた為今迄比較的等閑に付されていたことなどを表面の理由として、本当のところは、夏は海水浴場、冬は避寒地として京浜の人々に親しまれている当地の暮し易さに目をつけて三浦半島を選ぶことにした。

「三浦半島に決めました」なんて公表してはみたものの、当地に関する知識ときたら、浦賀水道を隔てて房総半島に對峙し、西には相模灘、更に伊豆半島を控えているという事をしつていて全くお話にならなかつた。

本来ならば、地域決定と同時に調査に着手しなければならない筈であるが、何や彼や取紛れ、かたて加えて生来の怠慢もあつて、光陰矢の如し、何時の間にか月日は過ぎ去つてしまひ、教壇の観察期間、実習期間とめまぐるしい日々が続くうちに学生々活最後の夏休み、その間北海道に遊び、そんなこんなで九月に登校した時には、四月以来何等の進歩もみていないことをしつて流石に聊か呆然とした次第であつた。

六月及び七月に合せて数日現地調査に赴いたけれども、予備知識の全くない終で現地を歩いて、観察の主眼がはつきりしないためにたいした成果はあげられないことを実感したに止まつた。

九月に入り、そろそろ調査結果の整理などにとりかからねばならない頃になつて、おくれに気が付いた時には、しなければならぬ事が多過ぎて全くどうなることかとイ感つてしまつたが、そろそろ呑気に構えてもいられないので、まず文献によつて地域の既況を把握べく「三浦半島」という四字を求

めて研究室の書棚や文献目録をひっくり返した。

十月の現地調査は大體土地利用に限り、聞き込みに重きを置いていった。農業改良普及所などの技師さん方の御意見や、実際に働くお百姓さん達のなまの感想など、文献から得ることのできない収穫があつた。

十二月中旬の寒風吹きすさぶ中を、防大助教授青田晋吾先生の御指導でロームの露頭巡り、凍りそうな岩壁にへばりついて手足も自他の区別がつかなくなつたけれども、これは地形区分の際の参考になり、やはり自分で動かなくては駄目だと感じたことであつた。

最後に調査地域の概要を記すと、地形的には三浦半島を三帯に分けた南帯の北半であり、略ぼ低平な台地が連つている。谷はこの台地を樹枝状に刻むのみで大きな沖積地には乏しい。しかし下ら、南帯の南半に比べればこれらの特徴はいずれも弱いものである。

この地域は洪積統である宮田層の分布範囲と殆んど一致し、その上を数層のロームが被覆するが、これらの関係からこの地域の地形発達を或る程度推量することができるように思われる。

地形、気候などの自然条件と共に、市場、交通などの人文条件に恵まれて当地域は都市への蔬菜供給地として有名である。名物の三浦大根は株々の理由から漸減の傾向を辿るのではないかと思われるが、今のところはまだ当地の現金作物として最も重要なものであり、夏は西瓜が台地上の景観を代表する。今後はカリフラワー、レタス等の進出が期待されている。又西風は強いけれども気候がよいので、東斜面には果樹栽培の適地が多く、農業改良普及所等でも奨励しているが、資金や技術の障壁でなかなか普及の域に達するのは困難のようである。

京浜工業地帯の伸長及び交通運輸機関の発達に伴つて今後益々近郊農村的な色彩を濃厚にして行くものと思われるが、房総、渥美などとの競合関係も問題になるのではなからうか。

九月には「追いつき追い越せ」だなどと大きな冗談をいつていたにも不拘、追いつきどころか追いつきさえもしないうちに時間切れになつてしまつたけれども、振り返つてみると数多くの珍談奇談と共に思い出多き数ヶ月間であつた。